九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

愛知淑徳大学「日本語表現 A1」（2 年生以上）授業実践報告

増地, ひとみ
追手門学院大学基盤教育機構 : 講師

https://hdl.handle.net/2324/4822593

出版情報：オンライン授業の地平 : 2020年度の実践報告, pp.95-95, 2021-04-30. 雷音学術出版
バージョン：
権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives International

愛知淑徳大学「日本語表現 A1」(2 年生以上)授業実践報告

増地ひとみ

1. 授業の目的と概要、授業内容、成績評価の方法等

愛知淑徳大学では、初年次生の必修科目として「日本語表現 T1」を開講している。本授業はその発展科目であり、学術的な分野における日本語運用スキルの中でも特に「書くこと」に重点を置く。教室で対面授業を行う際は、自作のテキストを配付し、それに沿って口頭で説明を行っていた。毎回の授業の後半に、学生同士で意見交換をするグループワークや、文章を読んでフィードバックし合うピア・レスポンスを取り入れていた。全 15 回の授業の中で、受講生は小レポート 2 本と期末レポート1本を執筆する。評価はレポートの完成度に加え、グループワークやピア・レスポンスの取り組み状況も加味して行う旨を通達していた。

2020 年度後期の本授業は、オンデマンドで開講する旨の決定が大学によりなされた。大学が用意したシステムの Microsoft Teams に科目ごとの「チーム」が設定された。担当教員と受講生のみがアクセスし、ファイルを閲覧したり書き込みをしたりできるクラスルームである。2020 年度後期の受講者数は 42 名であった。

オンデマンドによる毎回の授業は、レジュメと講義音声を Teams で配信して行った。レジュメは、自作テキストの元になった原稿を1回分ずつに分割し、PDF ファイルにしたものである。音声はボイスレコーダーを使用して、1 本あたり長くても 30 分以内となるように分割しながら録音した。ホワイトボードを使った図解説明が必要な部分で、一度だけビデオを併用した。出席確認課題を Microsoft Forms で作成し、Teams から配信した。レポートは Teams での提出を原則とした。

毎回の授業は、以下の流れで行った。①毎週月曜 10:00 に、Teams でレジュメと講義音声、および出席確認課題を配信 ②日曜 23:59 を出席確認課題の提出締切として設定 ③出席確認課題は、提出があったものからフィードバックと点数を入力し、Teams の「課題」機能を使って返却。出席確認課題は、自由に記述させるタイプを中心に、正解・不正解がある選択式の設問も含めた。講義を聞かずに Forms のみ送信する学生が出ないよう、講義音声を聞かなければ書くべき内容がわからないようにしたり、講義の途中で課題を提示したりするなどの工夫をした。成績評価は、毎回の出席確認課題(@3 点×15 回=45 点)、小レポート(1)10 点、小レポート(2)15 点、期末レポート 30 点の合計点によって行った。オンデマンド授業では、グループワークとピア・レスポンスは行えない。いずれも断念し、個人でアイディア出しなどの作業をさせた。そして、学生同士のピア・レスポンスの代わりに、学修支援施設「ライティングサポートデスク」(2020 年度はオンラインでサービスを提供)の利用を義務づけた。これにより受講生は、ライティング支援を専門とする教員スタッフと一対一で文章の検討をする機会を得た。

2. 今後の課題・可能性、もしくは受講生の反応等

従来の対面授業の時よりも、全体的にレポートの出来が良かった。オンデマンドであれば何度でも繰り返し講義を聞き直せることが、その一因かもしれない。授業後アンケートの結果も、「わかりやすかった」「対面授業と遜色ないと思った」と高評価であった。

今後の課題は、授業配信から出席確認課題提出までの期間設定である。1週間あるのは長すぎたようで、これは失策であったと反省している。月曜に授業を配信したならば、遅くとも木曜には課題を送信してほしかった。ところが、締切日である日曜の夕刻まで、半数以上の学生が課題を提出しない。締切を日曜にしたのも不適切であったかもしれない。学生は「土日にやればよい」と考え、先延ばしにしてしまうのであろう。

課題の 2 点目は、成績評価に関することである。対面授業と異なり、学生がどの程度真面目に取り組んでいるのか、その様子が教員からは見えない。出席確認課題で評価しようとしても、自由記述内容から取り組み具合を判断し、点数化することは困難であった。正解・不正解が明確に分かれる設問の分量を増やし、講義内容の理解度によって点数差が出るよう難易度を高めに設定すれば、実際の学生の取り組み状況を反映した評価が可能であったかもしれない。